（二〇一二年度）

2 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は18ページ、三問である。）

受験についての注意

一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、携帯電話・ＰＨＳの電源は切ること。
三、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
四、監督から試験開始の合図があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっているかどうか確かめること。
五、**解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**その他の部分には何も書いてはならない。
六、筆記具は、**ＨかＦかＨＢの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
七、マークをするとき、枠からはみ出したり、枠のなかに白い部分を残したり、文字や番号、枠などに○や×をつけたりしてはならない。
八、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
九、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。採点が不可能になる。
十、試験時間中に退場してはならない。
十一、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十二、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

常日頃、私たちは、「古典」とか「伝統」という言葉を、さしたる注意も払わずに使っている。「古典」は、英語の形容詞なら“classic”だろうし、「伝統」は“traditional”だろう。「クラシック音楽」と言えば、まずは十九世紀以前の西洋音楽を指していぶからないし、「伝統芸能」と言えば、日本の能狂言、歌舞伎、文楽などを意味していると考える人は多いはずだ。更には、「民族芸能」あるいは「民俗芸能」という言い方もあって、時たま音楽学者が、[1]「ベートーベンだって民族音楽なのだ」と声を振り絞って主張しても、学界に固有の奇矯な行動だと思って、取り合わない人が多い。いわんや、歌舞伎や文楽より四分の三世紀ほど前に隆盛を極めたフランスの悲劇や喜劇について、「伝統演劇」などと言い出す人はいないだろうし、「民族芸能」と言えば、まずは西洋文明の周縁部の話だと見なされる。

日本のものについて言えば、ＮＨＫの番組などが、能狂言、歌舞伎、文楽、更には日本舞踊まで、「古典芸能」というタイトルで通用させて人は訝(いぶか)らないのだが、それではこれらの芸能が、いつの時代から「古典」の称号を担うようになったのかと尋ねれば、大方の人は返事に窮する。一歩進めて、地方の寺社に伝わっているような芸能、たとえばなになに神楽と、顔見世の看板を掲げている歌舞伎とは同じ「伝統芸能」なのかと問えば、恐らく一様に違うという反応を示す。お神楽のほうは「民俗芸能」だ、などと言ってお茶を濁しておいても、諸外国へこれらの芸能が巡業に行ったときには、[2]問題は先鋭化する。五流の能と地方の神楽が同じ扱いを受けたならば、それは穏やかではないのだが、招いているほうにしてみれば、どちらも“traditional”の形容詞で括るのだから、能狂言も山伏神楽も違いはあるまいという受容態度である。

確かにヨーロッパでも、「伝統的」という単語を使わないわけではない。一六八〇年に、ルイ十四世の勅令によって創設されたコメディ＝フランセーズは、フランスで「最も伝統のある劇場」であるし、それより十年ほど早く作られた王立音楽アカデミー、つまりオペラ座も、歴史的に「伝統」であることには違いない。しかしだからと言って、コメディ＝フランセーズで上演されるコルネイユやモリエール、ラシーヌの作品を「伝統演劇」などとは決して呼ばない。それらは「古典劇」なのであって、そ

こに付けられる形容詞は「古典的」であり、「伝統的」ではない。これは時間的な古さや、制度の連続性の問題ではない。一六八〇年の日本では、まだ［3］が出るか出ないかという時期なのだし、歌舞伎にしても、創成期の混沌の中にあった。しかしフランスでは、ラシーヌ悲劇がコメディ＝フランセーズで、「古典として」上演されるべく定められて、この劇場の柿落(こけら)としには、ラシーヌの『フェードル』が選ばれていたのである。

辞書学的におさらいをしておくならば、「古典」あるいは「古典的」とは、［4］文芸の作品を言うのであり、それらは「クラス」で学習されるものであった。それは単に劇場の内部においての話ではない。公教育のカリキュラムに組み込まれて、二十世紀に至っても、たとえばラシーヌ悲劇の一作も、モリエール喜劇の一篇も読んだことがなくて、中等教育終了資格試験に合格するということはあり得ない、という全社会的な了解のもとで機能していた。それは舞台芸術の実践の上でも同じであって、俳優術の基本は、そうした十七世紀の古典主義劇作術にのっとった戯曲を学ぶことで培われてきたのである。音楽とバレエにおける規範の制度化は、それよりは遅れるが、しかし「クラシック」と呼ばれる作品群が、同じような機能を果たすことに変わりはない。だからこそ、[5]変革のベクトルは、これらの「古典」に批判の矛先を向け、あるいはそれらを乗り越えることで、成立してきたのであった。

それでは日本の「伝統芸能」に、同じような現象が認められるのだろうか。確かに、そのように呼ばれる芸能のジャンルの内部では、規範意識もあるだろうし、そうした「専門知」の伝達が、「伝承」という言葉によって表されるように、人から人へと、身体から身体へと伝えられて行く伝承のほうが、伝承の役割を[6]テクストが全面的に担っている場合よりも、強固でさえあるだろう。それが、西洋世界における「古典」の伝承とは大いに異なっていることは言をまたない。しかし、問題であるのは、そのような「伝承」が、あくまでも専門的な技能集団の内部の問題に留まっていて、社会的に広く共有されているものではないということだ。

もちろん、こうした専門的な技能集団においても、「古典」と呼びうるものがあったことを、例えば世阿弥における和歌や王朝文学のような形で、我々は知っている。和歌や王朝文学は、能作者世阿弥にとっては言うまでもなく、演劇人としての世阿

弥にとっても、美学的規範であり、つまり「古典」として、学ぶべきコーパスなのであった。同じようなことは、江戸時代の物書きたちにとっての謡曲や、戦物語についても言えるかも知れない。寺子屋での教材に、謡曲の抜粋が用いられ、こうした受容の回路を伝って、[7]式楽として閉ざされてしまった江戸時代にあっても、能の詞章が庶民のあいだで生き続けたこと、しかもその際、詞章の洗練された世阿弥系の謡曲が持て囃されたことが、明治以後の近代化の波に襲われた時にも、能の生き延びるよすがとなったことに、研究者が注目し出してから、すでに四半世紀以上は経っている。歌舞伎の台詞や人形浄瑠璃の詞章にしても、そのような 8 受容は、もっと注目されてもよいはずであった。

しかし、たとえばフランスの「公教育」における十七世紀の「古典の受容」と比べれば、それは、やはり個人あるいは限られた集団の楽しみのレベルに留まっていた。職業的専門知の伝承となれば、それは多かれ少なかれ、口伝あるいは秘伝といった、閉鎖的な「伝承」の回路によって可能になっていたに過ぎない。「伝統芸能」あるいは「伝統演劇」という、近代化の発明になる用語が、多かれ少なかれ[9]「秘儀伝授」のアウラをもって見られ、あるいは語られてきた謂れもそこにある。親から子へ、子から孫へ、と言った、[10]「血族的伝承」の神話を支えているのも、まさにこの文脈であった。

西洋型舞台芸術については、「伝統演劇」という単語を使わず、非西洋型のそれについてのみ用いるという単純な事実。それは、単なる用語の上のご都合主義とばかりは言えないだろう。そこには、公然と口にはしないものの、西洋社会の側からの、[11]サイード的な意味での「オリエンタリズム」が歴然と窺えるからである。それは、当然に「土着的なるもの」への幻想に裏打ちされているから、こうした「伝承」の知は、出来るだけ 12 な、つまり「民族的」あるいは「民俗的」な表象であることが望ましい。

（渡邊守章『越境する伝統』）

〈注〉 ○五流…能楽の五つの流派。
○コーパス…語彙索引などの言語資料。
○アウラ…オーラ。独特の雰囲気。

○サイード…『オリエンタリズム』の著者、エドワード・W・サイード。

問一　傍線部1の「ベートーベンだって民族音楽なのだ」とは、どういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　ベートーベンも庶民的な音楽性を多分に含んでいる。

b　ベートーベンも西洋の土着の音楽と深く関係している。

c　ベートーベンにも日本の芸能に類似した音楽がある。

d　ベートーベンにも「クラシック」と異なる作風がある。

問二　傍線部2の「問題は先鋭化する」とは、この場合どういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　諸外国で、五流の能と地方の神楽が同等に賞賛されること。

b　諸外国で、五流の能と地方の神楽が同様に軽く見られること。

c　諸外国で、能狂言と山伏神楽の伝統の違いが受け入れられないこと。

d　諸外国で、能狂言と山伏神楽の格の違いが理解されないこと。

問三　空欄3に入る人物としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　近松門左衛門　　b　井原西鶴　　c　鶴屋南北　　d　河竹黙阿弥

問四　空欄4に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　「伝承される」　　b　「規範となる」　　c　「歴史的な」　　d　「専門知の」

問五　傍線部5の「変革のベクトル」とは、この場合どういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　「古典」を公教育から排除しようとする方向性。

b　「古典」を舞台芸術の実践で応用しようとする方向性。

c　十七世紀の古典主義劇作術を刷新しようとする方向性。

d　音楽やバレエの「クラシック」偏重を改めようとする方向性。

問六　傍線部6の「テクストが全面的に担っている」とはどういう場合か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　もっぱら文字媒体によって伝承されていく場合。

b　公教育のカリキュラム頼みで伝承されていく場合。

c　もっぱら机上の専門知によって伝承されていく場合。

d　口伝という閉鎖的な回路によって伝承されていく場合。

問七　傍線部7の「式楽として閉ざされてしまった」とはどういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　形式的な音楽として発展していくことがなかったこと。

b　洗練された詞章が社会的に広く共有されなかったこと。

c　寺子屋での教材として庶民まで行き渡らなかったこと。

d　儀式として専門的技術集団の内部に留まっていたこと。

問八　空欄8に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　「庶民的」　b　「古典的」　c　「専門的」　d　「美学的」

問九　傍線部9、10の〈「秘儀伝授」のアウラ〉、〈「血族的伝承」の神話〉という表現に反映されている筆者の見方として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　専門的な技能集団における伝承は強固ではあるが閉ざされていた。

b　「古典」の伝承は社会的に広く共有されることで近代化してきた。

c　詞章の洗練された世阿弥系の謡曲は職業的専門知に留まらなかった。

d　和歌や王朝文学のような美学的規範が伝統芸能を「古典」たらしめた。

問十　傍線部11について、筆者は〈サイード的な意味での「オリエンタリズム」〉という語句でどのような指摘をしているのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　「土着的なるもの」という幻想に裏打ちされた「伝統」の誤用。

b　西洋世界にのみ「古典」という美学的規範があるとする先入観。

c　「伝統」という用語を東洋世界に対して使用する西洋世界の優位性。

d　「伝統」という用語を東洋世界にあてはめようとする一方的な態度。

問十一　空欄12に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　「非-土着的」　b　「非-技能的」　c　「非-東洋的」　d　「非-西洋的」

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

源三位入道はゆゆしく計らひ申したりけれども、遠国の者までは云ふに及ばず、近国の源氏だにもいそぎ打上る一人もなし。山門の大衆は心替りしつ。「その先途を遂げず、風吹けば木安からずと、世の煩ひ、人の歎き、身のため家のためよしなき事申し勧めまゐらせて亡びぬる者かな」と、貴賤口々に申しけり。

かの入道と申すは、清和帝の第六皇子貞純親王の二代の苗裔、多田新発満仲が子、摂津守頼光が三代の後胤、参河守頼綱が孫、兵庫頭仲正が子也。保元の合戦の時、御方にて一方の先陣を賜り凶徒を退けたりけれども、させる勲功の賞にも預らず、怨みを含みながら大内の守護して年久しく成り、地下にのみして殿上をゆりざりければ、

人しれぬ大内山の山もりは木隠れてのみ月を見るかな

と読みてまゐらせたりければ、「不便なり」とて、四位して昇殿を許さる。始めて殿上を通りけるに、ある女房の、

つきづきしくもあゆぶものかな

と云ひたりければ、頼政とりあへず、

いつしかに雲の上をば踏みなれて

と申したりければ、優に甲斐甲斐しと感じけり。又四位の殿上人にて久しく世に仕へ奉りけるに、述懐仕りて、

のぼるべきたよりなければ木の本に椎を拾ひて世を渡るかな

と申したりけるに依りて、七十五にて三位を許されて後、前途既に遂げぬとて出家して、源三位入道ともいはれけり。大方この頼政は、歌に於ては手広き者にぞ思し召されける。鳥羽院御時に、宇治川・藤鞭・桐火桶・頼政と四題を下させ給ひ、「一首に隠してまゐらせよ」と勅定ありけるに、

宇治川の瀬々の淵々落ちたぎり氷魚けさいかに寄りまさるらん

と申したりければ、時の人々、「我々は一の題をだにも一首に隠すはゆゆしき大事なるに、あまたの題を程なく仕りたる事、

実に有りがたし」と感じ申しけり。君も「いみじく仕りたり」と叡感有りけり。

（『源平盛衰記』）

〈注〉源三位入道…源頼政（一一〇四～八〇）。平安時代末期の歌人。武将。以仁王と平家追討を企てたが、事前に発覚して宇治平等院で自殺した。　山門の大衆…比叡山の衆徒、僧兵。　貞純親王…清和天皇皇子（生年未詳～九一六）。　多田新発満仲…源満仲（九一三～九七）。貞純親王の孫。経基の子。平安時代の武将。　摂津守頼光…源頼光（九四八～一〇二一）。満仲の子。平安時代の武将。　参河守頼綱…源頼綱（一〇二五～九七）。頼光の孫。頼国の子。平安時代の歌人。武将。　兵庫頭仲正…源仲正（生没年未詳。一一四〇ころ没）。頼綱の子。頼政の父。平安時代の歌人。武将。　藤鞭…藤蔓で作った鞭。　桐火桶…桐の幹をくり抜いて作った火鉢。　氷魚…鮎の稚魚。琵琶湖や宇治川で冬に多く収穫される。

問一　傍線部1「ゆゆしく計らひ申したりけれども」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　以仁王擁立は実におそれ多い計画であったということ。

b　平家追討の計画はあまりに時期尚早であったということ。

c　平家追討の計画そのものは実に立派であったということ。

d　以仁王とともに破滅することになる不吉な計画であったということ。

問二　傍線部2「その先途を遂げず、風吹けば木安からず」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　反乱はその目的が達成されないと、いたずらに騒ぐばかりで人々に迷惑がかかること。

b　頼政はその将来が不安だったので、小さなきっかけから大きな事件を起こしてしまったこと。

c　頼政がその最期を迎えるまでは、人々は落ち着いて夜も眠れなかったこと。

d　反乱はその決着が付くまでは、いつまでも世の中の矛盾を批判し続けるということ。

問三　傍線部3「よしなき事申し勧めまゐらせて」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　達成されても意味のないような反乱を、以仁王に決起させてしまったこと。

b　達成される可能性のないような反乱を、以仁王に決起させてしまったこと。

c　自分が決起する必然性などない反乱を、以仁王に決起させてしまったこと。

d　世の乱れを一層乱すことになる反乱を、以仁王に決起させてしまったこと。

問四　傍線部4「御方にて」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　宮中守護の役割を負っていたこと。

b　源氏方の大将として先陣を任されていたこと。

c　勝利した後白河天皇方に付いていたこと。

d　敗戦した崇徳上皇方に付いていたこと。

問五　傍線部5の和歌「人しれぬ大内山の山もりは木隠れてのみ月を見るかな」について述べたものとして適切なものを、次の中から二つ選べ。

a　中秋の明月の美しさについて、間接的に表現しようとしている。
b　月は天体の月だけでなく、長い年月を表象している。
c　月は天体の月だけでなく、自分自身の比喩にも用いている。
d　月は天皇の比喩であり、自分自身は山もりと表現している。
e　殿上を許されることを大内山の山もりと表現している。
f　大内山は内裏を指し、殿上人はその世界の住人と表現される。

問六　傍線部6「不便なり」とあるが、どのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　困ったことになった。
b　かわいそうな奴だ。
c　もっとうまく詠めないのか。
d　見事な和歌を詠んだな。

問七　傍線部7「いつしかに雲の上をば踏みなれて」は下句「つきづきしくもあゆぶものかな」に付けた上句である。この連歌について述べたものとしてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

a　皮肉に皮肉で返したが、期待はずれの結果に終わった。

b　「つきづきし」に掛けた「月」の縁語として「雲」を詠んだ。

c　殿上人を「月世界」の人間であると批判的に見ている。

d　「踏みなれて」には「文」が掛けられている。

問八　傍線部8の和歌「のぼるべきたよりなければ木の本に椎を拾ひて世を渡るかな」について述べたものとしてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

a　「椎」に「四位」を掛けて、四位昇進を感謝している。

b　木に登るとは、殿上人になることを比喩的に表現した。

c　「世を渡る」とは、処世の巧みさを表象したものである。

d　四位から三位への昇進は、歌人として長年の夢であった。

問九　傍線部9「前途既に遂げぬ」とあるが、どのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　もうこれ以上は出世できない。

b　ついに先祖の位階を超えた。

c　やっと人並みの扱いが受けられる。

d　将来への希望はこれで失せた。

問十　傍線部10「歌に於ては手広き者にぞ思し召されける」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　スケールの大きい和歌を詠む者として評価されていたこと。

b　和歌の領域を越えた才能を発揮するマルチタレントとして評価されていたこと。

c　和歌の知識に豊かなテクニシャンとして評価されていたこと。

d　即詠の名手として和歌を詠むスピードが何より評価されていたこと。

問十一　傍線部11「宇治川・藤鞭・桐火桶・頼政」とあるが、実はこの中で、「隠し題」(「物名(もののな)」ともいう。物の名を他の語句に隠して詠むこと)としては詠んでいないものがある。それはどれか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　宇治川

b　藤鞭

c　桐火桶

d　頼政

問十二　傍線部12の和歌「宇治川の瀬々の淵々落ちたぎり氷魚けさいかに寄りまさるらん」について述べたものとしてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

a　物名(もののな)とも呼ばれる超絶技巧を駆使したが、和歌そのものは意味が通りにくいものとなった。

b　自分の名前まで詠み込む技巧的な和歌であるが、冬の宇治川の情景が活写されている。

c　歌枕「宇治川」の伝統的な詠みぶりから脱却して、独自な境地を示している。

d　宇治川に寄り集まった氷魚は、頼政最期の決戦時に集まった平家の軍勢を象徴的に表現している。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

書かれたテキストは空間的な構造体であるが、それは[1]時間における構造体を内包している。書くことは時間を空間へと転じる。こうした点において、[2]言語的テキストは楽譜と似通っている。楽譜は、音符、小節線、休符、強弱記号などを視覚的にパターン化したものである。しかし、こうしたパターンが意味を持ったものになるのは、それらを連続した旋律として読んだ場合に限る。我々のほとんどは、もし楽譜が読めるとしたら、それはひとえに楽譜を楽器で演奏することによってであろう。しかし、よい音楽家は直接に楽譜を読んで、自分の頭の中で譜面上の記号から音楽を再現するのである。演奏することによってしか楽譜を読むことができない者は、声に出して言葉を言うことによってしか言語的テキストが読めない者と同様である。こうした人々は、ほとんど完全に音楽の[3]構造体の時間的な展開に飲まれてしまっているのだ。しかし、よい音楽家はこれと並んで第二の次元、すなわち楽譜上の「縦の」空間的な構成をも同様に読み取ることができる。テキストや楽曲を隅から隅まで読むには、ライティングにおける空間的次元と時間的次元の両者に注意を払うことが必要となる。そしてここでもまた、個々の事例におけるテキストの空間的次元と時間的次元との関係は、[4]そこで用いられるライティング・テクノロジーに依存することになるのである。中世の手書き写本においては、空間的構成と呼ばれるものは朱書きや種々の文字のサイズを用いて出来上がるパターンである。印刷された書物では段落わけをしつつページへと編集してゆくことが空間的構成と呼ばれるものに当たる。コンピュータではそれは、テキストの各ウィンドウやスクリーン上の画像のパターンである。テキストの時間的構成は、こうした要素に読者が時間をおって、その時その時に新たに出会ってゆくことから創造されてゆくものである。

読者が物語ないしはエッセイを読んでゆく時、言葉によって[5]期待のリズムとでもいうべきものがつくられてゆく。一つの言葉は、テキストで既に現われたものをほのめかしたり、来るべきものを予期させたりする。期待や、明示的な参照指示や暗示といったものもまた、物語を語ることや人前で話をする際の語りの技術の一部であることは疑いをいれない。しかしながら、話を聞くということと書物を読むということの間の重要な差異は、人が話を聞く場合には全く言葉が自分の方にやって来るの

に任せているが、書物を読む場合には読者が自分で言葉の動きをつくらなければならない、ということである。ページの上に見えるのは複数の符号からなるパターンであり、読者は一目見るたびごとにこうしたパターンのある一部分を見て取るのである。印刷された書物を読むことに熟達した読者であったなら、一目で語句やある文章の一節を見て取る。彼らの目は心理学者がサッカディックと呼ぶところの跳躍運動をしている。そして、こうした[6]跳躍の合間の休止時にある長さの文字を見て認知するのである。今日でも、書物を読むことの初心者は(古代や中世初期のたいていの読者と同様に)一つ一つの文字や単一のかたまりにいちいち目をとめ、それからそれぞれの行にそって自分で改めて綴りなおしてゆくような読み方をする。しかし作業ユニットが単一の文字であれ完全なフレーズであれ、読者に課された課題とはこうしたユニットを綴り合わせて有意味な秩序に仕立てあげることに他ならない。読むということは、言語的な要素を時間において活性化することなのである。英語の「読む(read)」という単語はアングロ=サクソン語の raedan からきている。そしてこの言葉は「助言する、解釈する」という意味をも持つ。この語源考察は、[7]読むということは話すことの派生的な形態であり、読者は沈黙したテキストを語らせることのできる解釈者なのだ、といった信念に基づいている。ラテン語の lego は、ロマンス諸語の「読書」にあたる単語(フランス語では lecture、イタリア語では lettura)の語源となっているが、これにはもっと面白い語源がある。lego は文字通りには「取り集める」という意味であるが、比喩的な意味の一つとして「道を開く、横切ってゆく」という意味をも持っている。この語源によれば、読むということは符号を取り集めてまとめ上げつつ、同時にライティングのほどこされている平面上を動き回る過程ということになる。記号空間の中を通り抜ける旅の途上にある読者――このイメージはあらゆるテクノロジーに対しても当てはまるものだが、[8]特にエレクトロニック・ライティングにふさわしいものである。

(J・D・ボルター『ライティング・スペース』黒崎政男他訳)

〈注〉 サッカディック…Saccadic Suppression。ものを明瞭な画像として見るために、目を動かす瞬間の流れる視覚像を遮断する脳の働き。

問一　傍線部1の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　書かれた内容が時間的な叙述であることによって、有意味な秩序をもっている。

b　時間的に物語られて展開されることで、まとまった内容として構造化されている。

c　読者によって時間的に読まれることによって、はじめて意味のある構造をもつ。

d　記述という手段によって、本来の時間的な秩序が書き手により空間化されている。

問二　傍線部2の理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　読者の時間的な理解によらなければ、記述のパターンが成立しなくなってしまうから。

b　さまざまな感情の流れや物語、段落の区切りなどを、空間的に構成したものだから。

c　時間的な理解によって意味が秩序化されるあり方を、空間的記述の中に含んでいるから。

d　読者の空間的な理解が、時間的な理解によってはじめてパターン的に秩序化されるから。

問三　傍線部3の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　テキストの時間的な流れに没頭して、それが空間的構造でもあることを失念している。

b　音を追いかけることに熱中して、音楽の方向性や到達すべき点を見失ってしまっている。

c　次々に音や言葉を追いかけてゆくだけで、ニュアンスの違いを読み取れなくなっている。

d　個別の音や言葉に気を取られて、それらの構造的なまとまりを理解できなくなっている。

問四　傍線部4の意味として適切でないものを次の中から一つ選べ。

a　新聞の紙面構成や広告のチラシで、見出しの文字を大きく色付けすること。

b　ある情緒を楽譜で音として表現するのに、どんな和音にするか考えること。

c　日本語の文章を書く際に、縦書きにするか横書きにするかを考慮すること。

d　コンピュータ画面で、画像パターンやウィンドウの重ね方を工夫すること。

問五　傍線部5の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　有意味な秩序を持たせるために、到来してくる言葉や符号が仕立てなおされる。

b　記された文字やフレーズが、明示的な参照や指示を求めて読者の方にやってくる。

c　読書によってつくりだされる言葉の動きが、テキストを時間的に活性化させる。

d　文字やフレーズが、読者によって一つ一つ目にとめられ、綴りなおされる。

問六　傍線部6の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　あちこちの文字に気を配りつつ、ときにはその文全体を見ることで文章の意味を活性化させる。

b　テキストの一部を瞬時に見て取ると同時に、関連するあちこちの箇所につねに注意を払う。

c　瞬間的に理解できる文字やパターンの間にある長い文章を読み、語句やフレーズの意味を知る。

d　瞬間的に見て取ったばらばらの語句や符号を、まとまったフレーズを読んで関連させてゆく。

問七　傍線部7の信念の理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　読むことは、有意味な秩序を自らまとめあげてゆく点で、話すことと同類のものであるから。

b　読むことは、テキストを時間において活性化することで意味をつくりだすことであるから。

c　読むことは、話すことの応用である助言や解釈に由来しているとみなされるものであるから。

d　読むことは、有意味なテキストを話すことのように綴り合わせて秩序をつくるものであるから。

問八　傍線部8のように筆者が考える理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　テキストの配置パターンにきまった意味がないために、読者に特定の方向性を感じさせないから。

b　テキストが特定の読者を前提せず、スクリーンや画像による記号として示されるだけであるから。

c　電子的な画像やテキストが、人工的な記号のユニットとしてもっぱら空間的に配置されているから。

d　テキストの電子的な配置だけではなく、読者が主体的に行動することが特に必要とされているから。